教育実習を終えて

日本語日本文学科　４回生

私の母校での３週間の教育実習は、不安や戸惑いから始まり、充実感や教師になりたいと決意を新たにした日々でした。また初めて気づかされたこと、現場を目で見て、肌でかんじたことは私自身を大きく成長させてくれたものとなりました。

実習１週目は参観実習が中心となりました。初日は何をどうすればいいのかもわからない状態で、生徒たちもいつもいない人がいる、と興味を持ってはくれますが自ら関わるような積極的な子どもはいませんでした。私自身、あまり人見知りをする性格でもなかったので、はじめの１週間は毎日クラスの全員に話しかけることを目標に積極的に子どもたちと関わろうと過ごしていきました。実習が始まってから３日目で指導教官の先生に生活ノートの点検を任されたり、朝のホームルームを担当することで少しずつ人間関係ができていったように感じます。

実習２週目から授業実習も始まり、さらに慌ただしい日々になっていきました。授業は指導案さえあれば成り立つものではなく、発問案を作ったり、補助教材を作ったり、毎日が時間との戦いでした。私は４クラスを受け持ち、「ガイアの知性」という評論文を６コマに分けて、教科実習だけで２４コマ行わせていただきました。元々子どもにバドミントンを教えるボランティアをしているので、人前に立つことや教えることに緊張や抵抗はありませんでしたが、各クラスにより雰囲気やレベルが異なり、なかなか同じように授業は進まないものでした。指導教官の先生に「授業は準備が命。様々な場面を想定して教材研究をしていきましょう。教材を研究しすぎることはありません。」と言われ、自分が自信を持って堂々と授業ができるよう納得するまで教材研究を行いました。また国語の授業ということで言葉遣いや漢字の書き順、発問の仕方にも注意しました。特に発問ではいかに簡潔に、また明確に発問するか、というところに悩まされました。言葉遣いや語尾が違うだけで生徒に全く違う意味で伝わってしまったり、本文を抜き出すだけの授業となってしまいます。答えが難しい発問ではグループで相談させたり、時間を多く設けたり、発問の仕方や答え方にも工夫が必要であることを感じました。

授業実習を重ねていくうちによく感じたことは、教師の気持ちや技術だけでは授業は成り立たず、授業は教師と生徒との信頼関係の上に成り立つということです。研究授業では多くの先生方に見学に来ていただき、その多さにさすがに緊張を感じずにはいられませんでした。休み時間も落ち着きなく動き回る私に、クラスの子どもたちが「先生の大事な発表の授業やもんな。みんな先生のためにめっちゃ手上げよな！」と声を掛け合ってくれていた姿に緊張をほぐされ、のびのび授業を行なえたことを今でも覚えています。見学に来ていただいた先生方にも「こんなに協力して授業を盛り上げようとしているクラスを初めて見たよ。」と言われ、本当に生徒たちに助けられっぱなしでした。授業の主役は教師ではなく、生徒なのだと改めて感じました。

実習最後には指導教官の先生にも「あなたならクラスを任せられると思えました。」と声を掛けていただけたり、子どもたちも涙ながらに送り出してくれたことを本当に嬉しく感じました。実習で改めて

教師になりたいという気持ちを強く持つことができ、採用試験にも臨めたと思います。この実習での貴重な経験を忘れることなく、４月からも生徒と信頼関係を築き、生徒に寄り添うことのできる教師となり、学校生活を送りたいと思います。

教育実習を終えて

英語英米文学科　４回生

不安と緊張でスタートした母校の中学校での教育実習。驚くほど早く過ぎていった３週間でした。

私が中学生の頃、教育実習の先生の授業を受けて本当の先生と変わらないぐらいしっかりとしていることに衝撃を受けたことを今でもよく覚えています。そんな教育実習の先輩方のように自分もできるのだろうか、また自分から積極的に話しかけて生徒たちの輪に入っていくことができるのだろうか、自分が考えた授業を生徒たちは楽しく受けてくれるのだろうか、本当に不安だらけのスタートでした。

授業の内容を考えることは、とても苦労しました。しかし、教育実習が始まる前に実習校から使用教材、授業の進み具合を教えていただいていたおかげで十分に教材研究ができ、「この本文ではここをこの例文を使って教える」ということを決めていたことが後々の自分の手助けとなり、良かったと思います。しかし、頭の中でイメージして「これで大丈夫！」と思っていた指導案でも実際生徒たちを目の前にしてやってみると、想像していたものとは全く違い、毎回のように苦戦していました。１番苦労したのがActivityでした。生徒たちが興味を持てる形で授業の理解度を深めようとゲームを考えるのですが、良いゲームが全然思い付かずとても苦労し、自分の勉強不足を痛感しました。しかし、行き詰った時には同じ教育実習生や担当教諭の先生に相談し、様々な案を頂くことができました。悩み、考えさせられることは多く大変でしたが、今までずっと生徒側から見ていた、ただ受けているだけの授業とは違い、先生側の違う視点から見ると授業の内容１つ１つに意味があり、先生方それぞれの考え方があるおもしろさを発見することができました。

授業が上手く行かず、くじけそうになった事もありました。そんな時、私を救ってくれたのは「授業楽しかったよ」「先生の授業楽しみ」と言ってくれる生徒たちの言葉。また、「みんな最初は上手く行かないよ」という担当教諭の先生からのお言葉でした。

毎日明るく話しかけてくれ、授業は熱心に聞いてくれた生徒たち。授業の見学をさせてくださり、たくさんのアドバイスをくださった先生方。いつも前向きで明るく、様々なことに協力してくれた実習生たち。この３週間は本当に人に恵まれ、支えられた日々でした。

３週間という短い期間ではありましたが、学んだことはとても多く、言葉では言い表せないほどの濃い期間となりました。このような貴重な経験ができ、本当に良かったと思います。この経験を必ず生かし、これからもどんなことにも挫けず何事にも前向きに様々なことに取り組んでいきたいと思います。

教育実習を終えて

神戸国際教養学科　４回生

母校の中学校での３週間の教育実習は、毎日が全力だったので本当にあっという間でしたが、いろんなことを体験し、発見できた貴重な時間になりました。私は、中学１年生の担当をさせていただき、週番活動・授業実習（英語、道徳）・部活動等を体験させていただきました。

実習の中で大半の時間を占めたのが授業実習でした。その中で私は、教育者としての自分の知識のなさを痛感しました。“Teaching English in English”ということを目標に授業実習に取り組んでいました。「授業内ではなるべく日本語を使わない！」と決めて、前日のシミュレーションでは上手く出来るのに、いざ生徒の前に立つと、「指導案通りに時間が進んでない」とか、「話聞いてない生徒がいる」など、すごく焦ってしまいました。ぱっと出てくる言葉は日本語ばかりでした。１００％英語で指導出来たのは決められている授業の初めの簡単な日常会話だけだったと思います。“英語を英語で教える”それは当たり前のことのように思えますが、実際にしてみると本当に難しかったです。

そしてこれは英語の授業だけではないのですが、生徒からは予測もつかないような質問や発言がとんでくることが何度もありました。そのような時の教師としての臨機応変な対応の仕方も、たくさん経験を積んで身につけていかなければならないなと思いました。私は授業実習の時に生徒から自分が予測もしていなかった質問をされて動揺してしまったことがありました。その時に先生から「質問などに対して、すべて答えを教えることだけが本当に生徒のためになるとは限らない。もちろん新しい知識を教えることが教師の役目でもあるけど、生徒自身に“考える”ということの大切さを教えることも大事なんだよ。」と言われました。たしかに、何か自分でアクションをおこして体験すること、つまり自分で考えて自分で行動することは大切だと思います。なぜなら、実際、この３週間でたくさんのことを体験して、悩んだり、喜んだりしたことで得たものは、私自身の考え方なども変えたし、影響力が強いものだったからです。

私は、この３週間の実習で反省点やこれからの目標をたくさん見つけることが出来ました。出来なかったことを出来ないままで終わらせず、次に生かせるようにしてきたいと思います。また、私は生徒の顔と名前を覚えることには、あまり苦労しませんでした。それは、誰とでもすぐ話しが出来るという私の長所だと思います。生徒とコミュニケーションを取り、生徒の変化に気付くと言うことは教師として重要なことです。実習中も、名前で呼んで話しかけるだけでも、生徒とのコミュニケーションがとてもしやすかったように思います。このように、上手くいったことは自信を持ってこれからも続けていきたいと思います。

そして、この実習で私が１番強く感じた“教師が全力で向かえば生徒も全力で向かってきてくれる”ということを忘れずにこれからも夢に向かって頑張りたいと思います。

教育実習を終えて

史学科　４回生

平成 22 年 5 月 10 日～ 5 月 28 日の 3 週間、母校の中学校で教育実習をさせて頂きました。

教育実習前から、教師という職業のやりがいや大変さは、大学の講義やニュースなどから認識していたつもりでしたが、実際の学校現場の雰囲気を体感して、自分が認識していた教師の仕事よりも多くの仕事があることを知り、驚きを隠せませんでした。

今までは、自分自身「生徒」の立場であったので、授業以外での教師の仕事を詳しく知りませんでした。今回の実習で現場の仕事を知り、中途半端な気持ちでは、教師になれない、なってはいけないということを再確認しました。

1 週目は、生活リズムに慣れること、生徒との人間関係をつくること、先生方の授業から少しでも技術を吸収することに力を入れました。2 週目からは、授業実習が始まり毎日教材研究に時間を費やすようになると同時に、生徒とも人間関係ができ、多くの生徒と接することができるようになりました。3 週目は授業実習と研究授業であっという間に時間が過ぎました。

授業実習では、生徒の興味をそそる授業を心がけました。指導案・副教材の作成にも時間を費やし、実習生と模擬授業をするなど、できるだけの準備をして望みましたが、いざ授業になるとうまくいかず、生徒に助けられてばかりでした。先生方が授業をスムーズに進める姿をみて、ただただ尊敬していました。

研究授業ではあがってしまい本当に自分が情けなくなりました。なによりも生徒に迷惑をかけてしまったことが一番の反省点です。反省会では、研究授業を見ていただいた先生から貴重な意見を頂きました。厳しい意見も中にはあり、へこみましたが、これからの私のために意見を言ってくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

教科指導以外に生徒指導・学級経営からも学ぶことが多くありました。現場の先生は、「教材研究や教科指導にもっと力を入れたいが、生徒指導に費やす時間の方が、どうしても多くなってしまう。」とおっしゃっていました。担任をしている先生は特に忙しく、生徒指導に追われていました。学校では、何か問題が起こると、迅速な対応・情報の共有化がなされていて驚きました。また、講義で学ぶ生徒指導と現場の生徒指導の違いも目の当たりにし、生徒指導の難しさを痛感しました。思春期の生徒と互いに影響し会える環境をつくるには、生徒と教師の間に信頼関係ができていることが本当に大切だと感じました。

指導教諭をはじめ、生徒のために一生懸命な先生が多く、たくさんの刺激を受けました。社会科や部活動を通じて、生徒に「一生懸命取り組むことの大切さ」を伝えたい！生徒の人間形成の発達に重要な時期に携わりたい！という自分の気持ちも再確認することができた教育実習でした。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

私は、島根県にある短大から編入という形で、神戸女子大学に入学しました。同学年の教育学科には、他大学からの編入生は他におらず、単位のこと、時間割のことなど、悩むことも多くありました。しかし今、無事に卒業を迎えようとしています。

私は入学当初、自分が小学校教諭になりたいのか、幼稚園教諭になりたいのか、悩んでいる時期がありました。教員採用試験に向けての勉強も、初めは「とりあえずやっておこう」という思いがあったため、なかなか集中できませんでした。

そんな中、迷いをなくすきっかけとなったのが、３回生の夏休みに地元で行ったボランティアでした。児童クラブで、夏休み中の小学生の宿題を見たり、一緒に過ごしたりというものでしたが、そこで、実際に小学生と関わることが楽しかったり、小学校で講師をしておられる先生に話を聞けたりしたことで、私の中の思いに変化がありました。

また、４回生の５月に行った教育実習がその思いを確信に変えました。私は、短大時に幼稚園実習に行ったこともあり、小学校での実習は２週間という短い期間でした。実習中は、授業をさせてもらってもうまくいかない部分が多くあったり、子どもたち同士の喧嘩等にどのように向き合えばいいのか分からなかったりすることもありました。しかし、上手くいかないながらも自分が「先生」となり教壇に立って授業を行っていることや、それに対して子どもたちが反応を示してくれることがとても嬉しかったり、休憩時間に子どもたちと一緒に遊んだり、交流をしたりすることがとても楽しかったりというように、充実した毎日を過ごすことができました。また、実習担当の先生を始め、実習校のたくさんの先生方から子どものこと、学校のこと、採用試験のことなどを聞かせていただきました。短期間であったため、小学校教諭の大変さなどを目にする機会は少なかったかもしれません。しかし、実習期間を終える頃には、絶対に小学校の先生になりたい、絶対になるんだ、という強い思いを持つことができました。

その思いを忘れずに教員採用試験に挑んだところ、地元である島根県の教員採用試験に合格することができました。筆記試験については、勉強してきたことをどれだけ発揮できるか、また、島根県は自分で考えて答える問題もあったため、時間内にどれだけの考えを持つことができるか次第だと思いました。面接等については、知らないことを知ったふりをしたり、決まった答え方をしたりするのではなく、自分自身を飾らずに見てもらい、考えや思いを正直に伝えることが大切なのではないかと感じました。そのためには、自分に合った勉強方法や試験の対策法などを見つけることが大事なのではないかと思います。周りを見て焦ることもありましたが、自分に合った勉強方法等を見つけられて良かったと感じています。

今振り返ってみると、実習を通して持った「先生になりたい」という強い思いが、試験官の方や面接官の方に伝わったことが採用試験の合格につながったのではないかと思います。この思いを今後も忘れることなく、その思いを持たせてくれた子どもたちを大切にできる教師になりたいです。

精神一到

教育学科　３回生

母校で過ごした日々は、夢のようでした。寝ても覚めても、頭に浮かぶのは児童や授業のことばかり。学校への足取りはとても軽快でした。実習を終えた今、胸中にあるのは「教師になりたい」という意欲です。「教師」という職業を多角的に見させて頂いたことで、理想でしかなかったものが、現実のものとして捉えられ、ますます教師になりたいと感じました。なぜ、そう感じたのか。実習を通しての学びを３点から述べていきたいと思います。

１つ目は、「叱る」ことです。教室にはいつも「ピシッ」と引き締まった空気がありました。朝会・授業・掃除…休み時間が終わるとともに生まれるその空気に、児童ものみ込まれていきます。しばらく観察し、先生の表情に空気の源があることがわかりました。決して、大声で注意するのではなく、児童が気付くのを待っている。言葉を使わず、目で今何をすべきか伝えておられました。そして、注意するときには、児童に「自分自身の行為」を客観視させ、静かに諭しておられました。これにより、児童は自分の行為を見つめ直し、反省することができたようです。後に、お話を伺うと「注意も、叱ることも、すべて児童のためを思ってすること。将来、立派な大人になれるようにするものだ」と教えてくださり、この言葉は、実習中の私の支えとなりました。

２つ目は、「認める」ことです。帰りの会で「今日のきらりさん」を発表するコーナーがあります。「誰かのよい行い」にみんなで拍手を送るというものです。その後、「先生からのお言葉」で、今日のがんばりや良かったことなどを褒められ、児童らは、気持ちよくそれぞれの家へと帰っていました。これが象徴することは、「叱る」と「認める」の両極にある２つが、常に存在したということです。些細なことに感じられる行為を見逃さず、しっかりと褒める。ほめられた児童を見て、他の児童もまねる。そのスパイラルから、児童らの中にきちんとした分別が根付いていたと思います。「いけないことはいけない。いいことは認める」という正義が児童の中にしっかりとあるからこそ、まっすぐ上へ伸びようとしている。さらに「認めてくれる」という安心感があるからこそ、良心に従って行動することができる。認めることの大切さを、身をもって知ることができました。

３つ目は、「目の前にある児童とともに授業をすること」です。たくさんの授業を通し、たくさん反省しました。その反省点に共通する問題点は、目の前にある児童を後回しにしたものだったように思います。その反省から学んだことを２つ述べたいと思います。

１つは、「児童がわかりやすい発問をすること」です。たとえば、ワークシートを用いる場合、それをどのような目的で使うのか見通しを立て、児童がわかりやすいようなたとえを用いて発問します。この発問を丁寧に行うことにより、手にした鉛筆が活発に動き、学習意欲・学力向上にもつながるのだと学びました。

２つは、「児童に教材を通して何を伝えたいか、どうなってほしいかを考えること」です。今、目の前にある児童をしっかりと見つめ、何が必要で、何を伝えたいかを考える。そこから、この教材をどのように伝え、どうやって願う像に一歩でも近づけるようにするかを考えながら、授業を構成することが大切だと学びました。

ここで得た学びを生かし、再び、教育の場に戻ってこられるよう、日々精進したいと思います。

教育実習で学んだこと

教育学科　４回生

私が教育実習に行き、学んだことについて述べます。まず私は県外の母校での教育実習で、期間は２学期から約１ヶ月でした。当時、私がいた頃とは大きく違って総児童数が２倍以上の大きな学校になっており、「一体どんな子どもたちがいるのだろう。」と不安に思いながら実習初日を迎えました。

まず、私は教育実習をしていく上で実習前に心がけることを決めていました。それは明るく、元気に、毎日自分で目標を持って生活することの３点です。せっかくの教育実習をより充実させるためにこのようにしました。初日にクラスで自己紹介をするとき、普段からスクールサポーターやボランティアで児童の前に立つ機会は多くありましたが、いざ目の前に児童がいると緊張してしまいました。一呼吸おいて笑顔で、明るい声で「おはようございます。」と口を開くと、児童から元気な声が返ってきました。それからは児童からも積極的に声をかけてくれたり、休憩時間には遊びに誘ってくれたりしました。また、毎朝徒歩で通っていたため児童とも積極的に挨拶を交わし、学級以外の児童とも仲良くなる機会につながりました。そして、「今日は学級の児童の名前を覚えよう。」や「今日は先生の指導方法から１つ学ぼう。」など具体的に目標を持って生活していきました。

次に授業についてです。大学の講義で指導案作成、模擬授業をおこなう機会はあったと思います。実習中に私が作成した指導案を見て、指導をいただくとなかなか上手くいくものではありませんでした。しかし、そのような場合でも指導教諭や他の教員の方にもアドバイスをいただきながら、徐々に具体的に書き進めることができるようになりました。

また、私が今回特に考えさせられたことに「児童の実態に合わせた授業展開の大切さ」があります。同学年の他学級の授業を見学したときに、例えばＡクラスでは１つの映像を出すだけで児童から次々と疑問、質問が飛び交う授業もあれば、映像を見て、一人ひとりがじっくりと考えてノートにまとめてから発表するなど、本当に様々でした。私が担当したクラスでは自分の意見や考えに自信が持てず、なかなか発表しようとする児童が少なかったために授業では、１回ノートにまとめてから発表する方法で進めていきました。そうすることで自信を持って発表できたり、また個人の中でも考えを確定したり、多様な考えを持ったりすることができます。書くことは時間がかかりますが、教師が児童の考えを知ったり、理解を確認したりもできます。しかし、その一方で 45 分という短い時間の中でどのくらい時間をとるか、ということが難しかったです。児童がしっかり考えられる時間と間延びする時間の間をとらなければなりません。教師が児童の実態を理解した上で授業を構成していくことは児童にも分かりやすく、円滑な授業を作っていくことができると今回学びました。教育実習の中ではより多くの児童とかかわることができたので、これから先、教員になった時に十分活用していけることだと感じました。

最期に、教育実習では児童と楽しい毎日が過ごすことができ、また多くの先生方にお世話になりました。これを機会にさらに教員志望へのモチベーションを高めることができました。

本当に感謝しています。ありがとうございました。

教育実習を終えて

教育学科　４回生

私は、１年間新任の先生のクラスで実習をすることができました。４月から私も幼稚園教諭として働くということもあり、先生の姿を自分と重ね合わせて実習に取り組むことができました。１年目から担任を持つ難しさ、クラスをひとつにまとめることの大変さなどこのクラスだからこそ学べた・感じられたことが多々あると思います。実習で学んだことの中で、最も印象に残っている出来事をまとめていきたいと思います。

まず、１つ目は「子どもと共に保育を創り上げる」ということです。音楽あそびや劇あそびなどの行事を、中には保育者が決め、それを子ども達にさせるという園もあると思います。子どもに無理強いをさせても上手くいくことなんてありません。みんながやりたい、自ら取り組みたいという積極性が集まってこそ、そのクラスならではのものが出来上がると思います。子ども達に、その興味・関心がもてるようにするかが保育者に求められます。私のクラスは最初は気持ちがまとまっておらず、バラバラ状態でしたが、最後の発表時には感動して言葉がないほど素晴らしいものが出来上がっていました。先生も初めは戸惑いと不安な気持ちが現れているようでしたが、行事を積み重ねる度に堂々とし、子どもの気持ちを１番に考えて取り組んでおられたと思います。そういった気持ちを全て子ども達は感じ取り、先生が不安だとそのまま鏡のように子どもの気持ちや行動に現れるのだということを私は身近に感じることができました。第３者として保育に関わりながら、先生と子どもの双方の気持ちが痛いほどよく分かりました。

２つ目は、「子どもの性格を充分に理解する」ということです。これは保育者として最も基本的なことであり、最も難しいことだと思います。私の担当したクラスは本当に性格が様々で、初めて子どもと関わった時はどうなることかと思うほどでした。しかし、先生は子ども一人一人のことを理解するよう努め、その子に合った対応の仕方を考えながら、保育をしておられました。そういった姿勢を子ども達に見せることが大切なことなのだと改めて学びました。１つ目と重なるところがありますが、子どもは先生の姿をみて、本当に自分達のことを考えてくれているということを頭ではなく、「こころ」で感じるのだと思います。そこから、徐々に信頼関係が深まり、クラスもひとつにまとまっていくのです。

子どもの成長過程において、大きな影響力となる保育者という職業は想像以上に大変であり、それだけやりがいのある仕事だと感じました。子どもの成長する姿と共に、私自身も一緒になって成長できた、とても充実した１年でした。どのような状況でも、子どものことを１番に考えて保育に取り組むことを忘れないように心掛け、今回学んだことを今後の自分に十分に活かしていけるように頑張っていきたいです。

幼稚園ボランティアを通して

教育学科　３回生

私は幼稚園の先生になることが夢です。そこで実際に現場で働く前に、様々な園を知ることで自分のこれからに繋げたいと思い、公立幼稚園、私立幼稚園、自分の通っていた私立幼稚園の３ヶ所でボランティアをさせて頂きました。その中で学ばせて頂いたことが、４つあります。

１つ目は、園によって雰囲気や時間の使い方、その園が大切にしていることが全く違うということです。子どもや保護者の雰囲気まで全く違う３つの園でしたが、どの園も大切にしていることが保育や時間の使い方に明確に現れていました。このことから、自分の中に保育をする上で大切にしたいことを明確にし、保育を作り挙げていくことが大切なのだと感じました。

２つ目は、自分が考える“子どもにとって良い保育は何か”を考えるきっかけを頂いたことです。幼稚園に行く度たくさんの保育を見ることが出来、その保育に対する子どもの目の輝き、身の乗り出し方、返答の違いなどに気づき、自分の保育はどうすれば子ども達に“楽しそう！やってみたい！”という気持ちになってもらえるかと考えるようになりました。まだ答えは模索中ですが、これからの研究を通して自分の保育のあり方を明確にしていきたいです。

３つ目は、自分はこうありたいという理想像を見つけることができたことです。ボランティアでは、たくさんの先生に出会うことが出来ました。外で子ども達と思いっきり鬼ごっこを楽しむ先生、子どもの気持ちを受け止めながら話をする先生、無知な私をそのまま受け止めて下さり優しく見守って下さった先生、子ども達の前で実際に様々なことを経験させて下さった先生、たくさんの出会いから、たくさんの学びを得ることが出来､私は自分はこうありたいという明確な理想象を確立することが出来ました。

４つ目は真剣に子どもと向き合う経験が出来たことです。一緒にお弁当を食べたり工作をしたり楽しいこともたくさんありましたが、時には喧嘩に直面したり興奮した子どもから攻撃を受けたり、子どもへの接し方に悩んだこともありました。私やお友達を叩いたり、ぶつかったりしても何も言わずすぐ逃げてしまう子に対し、目と目を合わせ真剣に何回も伝えたいことを伝えました。それでも何も変わらない状況に対し、自分の行動・言葉がけが間違っているのではないか不安に思う時期もありました。それでも何回も目を見て伝えました。その子どもから、ある日お友達を叩いてしまった際「ごめん」という言葉が聞こえてきた時の感動は忘れることが出来ません。真剣に向き合うことの大切さを知りました。

最後に、ボランティアでの出会い、経験は本当に私の宝物です。これからも、たくさんの出会い・経験ひとつひとつに感謝しながら研究に励みたいです。

教育実習を終えて

家政学科　４回生

私は神戸市の中学校に三週間実習に行きました。神戸市は教育委員会で実習先が決まるので、私の実習先は、母校ではありませんでした。

事前指導では、担任の先生に、とてもにぎやかで明るいクラスだということを聞いていました。実習が始まるまでに自分のキャラ設定をしてくるように言われました。そのキャラで生徒たちがこの先生はどういう先生か、どのように接したらよいかを判断するので、三週間ぶれない自分のキャラを作ってきてくださいと言われました。そこで、クラスが明るくてにぎやかだということもあり、私もいつもの自分通り、明るく元気でノリの良いキャラで行こうと決めました。実際会ってみると本当ににぎやかでとても元気なクラスでした。

担任の先生に、最初の１週間は人間関係を作ることを心掛けてみてくださいと言われました。授業も学校での生活も、そこからスタートしますとアドバイスをいただきました。なので、休み時間もクラスに行って話かけたり、みんなの様子を観察したりと一週間でできるだけたくさんの生徒と関わりました。そうすると、生徒もなにかしら反応してくれ、生徒から話しかけてくれたり、授業にも参加してくれたりしました。特に気を付けていたことは、毎日のあいさつは欠かさず、生徒の少しの変化も見逃さないようにしていました。昨日と少し雰囲気が違ったりすると声をかけるようにしていました。

正解のない道徳の授業を生徒に理解してもらうように説明することや、教育実習生が、生徒にどこまで踏み込んだら良いのかなど、わからないことが多くありました。しかし、困ったときは、担任の先生も教科担任の先生も、私の話を聞いてくださり、的確なアドバイスをしてくださったので、とても参考になり、毎日が充実していました。

教師は生徒にとって、とても影響力があり、軽はずみな言動、何気ない一言が、生徒にはずっと残ったりするということを知りました。

授業では、一回目よりも二回目の方がうまくなるのは当たり前で、徐々に授業にも工夫ができるようになりました。先生にたくさん指導をしていただき、反省会で注意されたことは次回には改善するように心がけました。研究授業では、たくさんの生徒が協力してくれて、スムーズな授業ができました。人間関係を築くというのは本当に大切なことなのだと実感できました。

実習では、生徒と深く関わることができませんでしたが、もっと生徒たちと関わっていきたいと思いました。生徒と心から向き合い、たくさんの人間関係を築きたいと思っています。生徒の変化に気づき、問題が大きくなる前に対処できるように気を付けたいと考えています。

まだまだ、教師としては何もできないけれど、明るく元気でいることを忘れず生徒と接していこうと思います。日々勉強をし、向上心を持って常に成長し続けたいです。

栄養教育実習を終えて

管理栄養士養成課程　4 回生

私は母校で 1 週間という短い期間でしたが教育実習をさせていただきました。数々の貴重なご指導を頂戴し、多くの経験をさせていただき、毎日が新しい発見と再確認の繰り返しでした。

母校には栄養教諭の先生がおられ、給食は自校式で委託給食会社が入っていました。

今回の実習では 1 年 1 組に席を置かせていただき、実習期間中は積極的に児童に声をかけ、コミュニケーションを取りながら、児童の名前を覚え、性格や特徴をできるだけ掴むように心掛けました。また、担任の先生と児童との関わり方をすぐそばで拝見させていただくことで多くのことを学ばせていただくことができました。また、他学年の授業参観もさせていただきました。

給食については、調理室での業務やランチルームでの食育、地場産業や地産地消についてもご指導いただきました。また、アレルギー食の対応が行われており、児童の手に給食が渡るまでに何重にもチェックがかかり、確実に安全なものを提供するように細心の注意がはらわれていました。児童は、自校式のため校内に給食の匂いがたち込めると「お腹空いた」「今日の給食は○○だ」「いい匂いがする」などと給食を楽しみに待ち望んでいる様子で、とても微笑ましく思いました。

しかし、実際には給食の時間を苦痛に感じている児童も少なくないのが現状でした。児童と一緒に給食を食べていると「嫌いなものでも、給食はみんなと一緒だから食べられるよ」「家では出てこないものが給食では食べられるから嫌いなものが入っていても食べられる」と話してくれた児童もおり、給食の大切さを改めて感じました。そして、低学年のうちに少しでも好き嫌いや食べず嫌いがなくなるように給食の時間や特別活動で行われる食育の重要性を実感しました。

栄養教諭の先生が 4 年生に食物繊維についての食育を行われている様子を参観させていただきました。パワーポイントを用い、音響効果を上手く取り入れ、それ以外にも様々な媒体を使用し、児童の興味を惹く授業でした。媒体の使い方、声の大きさ・アクセントなど児童に伝わりやすく、給食を食べながら楽しく、興味・関心を持って学習でき、食育の基本は給食に関連付けて行うことであると感じました。

研究授業は最終日に 1 年 1 組の特別活動の時間に 2 時間行いました。実習前に予め提出していた指導案を実習中に、栄養教諭と担任の両先生から評価して頂き、内容は多少変更する程度であったため、教材研究・事前準備ともにしっかりと取り組めました。実際に児童の前で授業を行うのは初めてで不安でしたが、授業が始まると児童は元気いっぱいで、興味を持って積極的に参加してくれ、担任と栄養教諭の両先生のサポートもあり、児童に教えるだけではなく、一緒に学ばせてもらいながら授業を作り上げることができました。

1 週間と短い間でしたが、フレンドリー遠足、市の教育委員会による研究授業、事後研究会（人権）等にも参加させていただき、内容の濃い充実した実習でした。とても温かい先生方にご指導いただき、栄養教諭の先生はもちろん、担任の先生、他の先生方のお心遣いによって大学では学ぶことができない貴重な時間を過ごすことができ、児童の様子を目ざとく観察すること・気づくことが大切であることを学びました。教育実習で学んだことを生かして、日々努力していきたいと思います。

教育実習を終えて

健康福祉学科　社会福祉コース

教育実習が始まる前、母校ではない学校というところでとても不安がありました。なぜならば、生徒感が全く分からなかったからです。また、どの程度の学力なのかも全く分からない状態でした。前任の先生との引継ぎのため、事前指導（実習１週間前）まで教科書・実習範囲なども分からない状態でした。

いざ、実習が始まると１日目の登校途中に生徒から声をかけられ、学校に馴染めそうな気がしました。生徒の雰囲気はすぐ掴めましたが、校風にはなかなか掴む事ができませんでした。

授業のほうは、生徒の語彙力があまりなかったのでどうすれば分かりやすく、理解してもらうことが出来るのかという点に苦労しました。担当の先生が好きにして、自由に授業を進めてくださいと言われてたので、その点は気が楽でした。

私はこの実習で、クラスの生徒たちには HR でしか会わないので、夢や希望を持ってそれに向かっていって欲しいと思ったので、現実はあまり伝えず応援するように接しました。授業で会う生徒たちには福祉の現実を知ってもらいたいという思いから、３回生のときの実習の話を織り交ぜながら現実を伝えていきました。教科書には載っていないことが知れて良かったと生徒や担当教諭からも好評でした。

特に心に残っている授業は、性病についての授業です。ある授業の中で病気を扱ったときに、生徒から全く知識がないから分からない、という声が上がり、担当教諭にお願いをしたところ、面白そうだからいいじゃない、と快諾していただきました。実習生だからこそできる微妙なニュアンスの言葉や生徒の質問にも答え、生徒からここまで教えてもらったの初めてだ、と言ってもらえました。

部活動ではバスケットボール部で一緒にプレイしたり、指導を経験させてもらいました。私たちの年代のチームカラー、よき伝統が無くなっていたのがすごく残念でここを変えないとチームが強くならないと感じたので、言葉だけでなく態度で示したりし、伝えていきました。

この実習での反省点はもう少し積極的に他の先生方と関わりを持ち、授業見学に行けば良かったと思います。他の授業を見ることで自分の授業がよりよいものになったかもしれないと感じたからです。

教育実習での経験をここだけにしておかず、社会に出たときに活用していこうと思います。

観察実習レポート

教育学科　２回生

１．スクールサポーターとして得たもの

①　児童との関わりから得たもの

実際にスクールサポーターに行くまでは、子どもとかかわる機会が少なかったのですが、実際に子どもたちとかかわり、子どもの笑顔に元気をもらったり、頑張る姿に私自身がやる気をもらいました。また、特別支援学級で活動し、今まであまり学んでいなかった特別支援にも興味がわいてきてすごくいい経験ができました。

②　教師との関わりから得たもの

教師とのかかわりから得たものは、先生の子どもに対する愛情です。先生は子どもが来ていない時から準備をしたり、子どものために働いていました。これは当たり前のことかもしれませんが、その時の先生の顔や言葉が生き生きしていてほんとに子どものことを考えているんだなと思い、わたしもこういう先生を目指したいと思いました。

③　学校という組織との関わりから得たこと

学校という組織は先生だけでなく、栄養士さんや事務の先生、管理員さんなどいろんな職種の人たちで成り立っているんだなということを改めて感じました。管理員さんや事務の先生も直接子どもとかかわることは少ないですが、みんなが子どもの安全や生活を守っていることは素晴らしいなと思いました。

２．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていること

一番印象に残っているのは、運動会の練習です。５，６年生の組み体操の練習に参加していた時、子どもたちは必死に練習していました。しかし、倒立がうまくいかなかったり、タワーがくずれたり、うまくいくことばかりではありませんでした。できてない子は休み時間ごとに体育館へ行き、練習していました。また、できている子は休み時間に、できない子が練習しているところへ行き、アドバイスをしていました。みんなで組み体操を完成させようとしていました。運動会当日は、子どもたちも気合が入っており、組み体操は練習以上の成果を発揮していて、すごく感動的でした。子どもたちがお互いに励ましあって１つのものを作り上げる姿が一番印象に残っています。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点は特にありませんでした。強いて言うなら、前期はスクールサポーターに行ける日がありましたが、後期はいけなかったので年間を通していけるように時間割を組んでもらえたらいいなと思いました。

実際スクールサポーターをして困ったことは、特別支援について勉強していなかったのですが、担当したクラスが特別支援のクラスだったのでそこにいる子どもたちにどう接したらいいかということです。

学校に行くうちにだいぶ接し方がわかってきたり、その子が抱える問題について勉強したりして、知識が増えてよかったですが、最初のほうはその環境に慣れることが大変でした。

4．2．3回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。4回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

応募します。理由は､学生のうちにいろんな学校を見て少しでも知識を増やしておきたいからです。実際に小学校に行くのと学校で勉強するだけでは、ぜんぜん違います。だから学校だけでなく現場でも知識を増やしたいと思います。また、今回は特別支援のクラスに入っていたので次は普通学級の様子も見てみたいと思います。このような理由により、次回もスクールサポーターに応募したいと思います。

5．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

今、いろんな先生の教える姿をスクールサポーターで見ています。そのことを生かし、先生方のいい教え方、児童とのかかわり方、などをしっかり盗んで将来の自分の教師像をはっきりさせていきたいです。また、学校独自の行事や授業のやり方もあるのでそれらも見て、感じて、経験してどういうふうにしたら子どもたちが楽しく勉強できるかということを自分のものにしていきたいです。

6．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

スクールサポーターに行って、将来の夢に向けて頑張る意識が高まりました。来年も参加したいです。

観察実習レポート

教育学科　３回生

1．スクールサポーターとして得たもの

①　児童との関わりから得たもの

たくさんの引き出しをもつ大切さです。30 人 30 通りの児童たちと接するためには、私の中に 30 通り以上のキャパシティーがないといけないと実感しました。それぞれの個性を大切にしようとする姿勢は子ども達に伝わると思います。しかし、「しようとする姿勢」と「できるかどうか」はまた別の問題のようにも思います。だからこそ、もっとたくさんのことを学び、個性あふれる児童に柔軟に対応していけるように、私自身も磨いていきたいなと思いました。

②　教師との関わりから得たもの

西舞子小学校の先生方からは、たくさんのアドバイスを頂き、本当に勉強になりました。その先生方からの学びに共通することは、「わからないことを解決しようとする姿勢の大切さ」です。活動中にも様々な疑問が浮かびました。たとえば、活動当初 算数の授業でどのように動けばいいのか戸惑い、先生に尋ねると、私の役割が明確になり、スムーズに動くことができました。また、通級している児童のケア。自閉症の児童との接し方に戸惑い、先生に尋ねると、的確なアドバイスをしていただきました。そして、それが大きな契機となり、その児童とも良好な関係が築けるようになりました。これらのように、わからないことを解決しようとすることで、活動はより密度の濃いものになり、先生方との関係も良好になるのだなと学びました。親身なご指導をしてくださった先生方には感謝でいっぱいです。

③　学校という組織との関わりから得たこと

「ほう・れん・そう」の大切さです。西舞子小学校は学年２クラス編成でしたが、一人の児童の情報を多くの先生方が共有しておられました。そのため、何か問題が起こったときでも、担任の先生一人だけではなく、多くの先生の協力を得ながら対処しておられました。そのためより質の高い教育がなされているなぁと感じ、教育は人とのつながりが大切であると学びました。

2．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていることを記述してください。

「はやく算数の授業がしたい！」と言った児童たちの姿です。長い休み時間を終え、先生を待つ児童たちが発したこの言葉には、とても驚かされました。「はやく勉強がしたい！」「勉強が楽しい！」という思いが伝わってきたからです。授業を観察していると、児童の手がテンポ良く、天に向かってまっすぐに上がっていきます。当てられて児童は実に嬉しそうに発表していました。この原因をさぐっているとあるポイントが３つ見えてきました。１つは、授業の展開が段階をふみ、スムーズであること。児童の意欲を高めるために、最初は誰もがわかる問題を提示し、次のステップを求めさせる。そして、どんどんステップを上げていくといった展開でした。２つめは、わからない問題はすぐに解決させる

こと。児童の手がすすまない時は、すぐに「わからない人？」と確認し、丁寧な説明をされていました。これにより、わからないことによる意欲の低下は大きく避けられていたと思います。３つめは、「わからないことは決して恥ずかしくない！」という雰囲気を創ること。当てられて、間違った児童に対する先生のケアはとても丁寧で、間違えたことよりも、その児童がつまずいたであろうポイントを一緒にさがし、解決しておられました。そのため、間違えた問題が、クラス全体の学びになっていました。

「勉強がすき！たのしい！」そんな授業を創っていけるようにがんばりたいと思います。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

特に課題や困難は感じませんでした。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

応募しません。２回生からスクールサポーターとして活動し、本当に大きな学びを得ることができました。だからこそ４回生では、教員採用試験に専念し、学びを得させていただいた方々に恩返しができるよう頑張りたいと思います。

下級生に勧めます。勧めるポイントは３つあります。

１つは、学校での机上の学びだけでは得ることのできない「実践的な学び」を得られること。子どもと関わる機会に乏しい大学生活で、年間を通し、週に１度、子どもたちと接することのできる機会は本当に貴重な時間だと思います。また、子どもたちと会うことにより、教師になりたいというモチベーションを保ち続けることができるのも魅力だと思います。

２つめは、大学で学んだことを実践できる場でもあると思います。算数の指導、ほめ方、叱り方など学んだばかりの知識を実践することで、かなり効果的に知識を定着させることができたと思います。

３つめは、先生方と接することができることです。授業の展開で大切にしたいこと、こんな時どのように対処すればいいかなど、たくさんのアドバイスをしていただきました。何より、先生方とお話しできるというのがとても貴重な時間だと思います。

これらから、下級生にはスクールサポーターを強く勧めたいと思います。

５．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか？

この経験はとても大きなもので、ひとことには言い切れないのですが、経験を通して得た内のひとつをここでは述べたいと思います。私が今期得た学びで、とても大きかったものは「教師間のコミュニケーションの大切さ」です。ある児童に対する問題を一人ではなく、学年の教師団で共有する大切さ。何か問題が起こったときの、報告・連絡・相談。放課後、ひと息ついた時のおしゃべり。どんな時をとっても、建設的なコミュニケーションは大切だなぁと強く思いました。普段からの関係が、結果として児童にも良い影響を及ぼすし、職場も楽しくなる。私が教師になった時は、建設的なコミュニケーションをすることを心掛けていきたいと思います。

６．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

学校観察実習というシステムが本学にあり、またそれを活用することで、単位取得もできるという環境は、本当に恵まれているなぁと思いました。昨秋、教育実習を終えましたが、違った環境に１ヶ月間飛び込むことに、不安を抱いていましたが、違和感なく馴染むことができました。これは、スクールサポーターとして小学校に通っていたからだと思います。この活動は、今期で最後となりますが、次は、教師として教育現場に戻れるよう、この体験を通して得た学びを生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

観察実習レポート

教育学科　４回生

１．スクールサポーターとして得たもの

①　児童との関わりから得たもの

昨年度活動していた学年で、継続して活動させていただきました。同じ小学校で、３年目の活動になります。数ヶ月会っていない間に、子どもたちは、心も体もずいぶんと成長しており、驚きました。それと同時に、「岩倉先生や～、今日は何年何組の教室にくるん？」と喜んでくれ、今年度も精一杯活動しようという気持ちになりました。

２年生になった子どもたちは１年生の頃と比べ、係の仕事にやりがいを感じてスムーズにこなせていたり、クラスの中で自主的に提案をして皆で遊ぶことができていたり、最初は、私が子どもたちにできることは何だろう、というスクールサポーターの活動を始めた頃の気持ちが一瞬、頭の中をよぎりました。そんな中、担任の先生がいない朝の会の時間に、ある児童がクラスの友達に対して傷つく一言を言ってしまう、ということがありました。これは絶対許してはいけない、と感じた私は、その児童を叱りました。叱った児童が、自分がしたことがどうしていけないのか、理解できたのか心配でしたが、その時にクラス全体にその児童を許してはいけない、という空気が流れていたことには安心しました。

また、注意を受けた児童が、次は同じようなことをしている児童に注意する姿が見られ、注意したことがきちんと理解できていると感じて、嬉しくなりました。叱ることは本当に難しいと思いますが、子どもとしっかり向き合うことで、伝えたいことが伝わる、ということを実感することができました。そして、その後にしっかりと児童のフォローをしていくことが大事だと感じました。また、最初に一瞬頭をよぎった気持ちとは裏腹に、子どもたち一人ひとりとしっかりコミュニケーションをとり、子どもたちの心が豊かになるような言葉かけや補助したい、とサポーターとして尽くす決意を再確信することができました。

②　教師との関わりから得たもの

①の話に続きますが、児童を叱った時、そのことを担任の先生に相談しました。叱ったときに、叱り方や叱るタイミングなど、本当にこれでよかったのか、疑問がたくさんありました。そのとき、担任の先生に、「自分の中で許さないことをしっかり持っておくこと。子どもがそれをしたら、しっかり叱る。何がいけないのか子どもが自分で言葉にする。そして、次どうしたらいいか考えさせる。更に、『失敗は誰にでもある。次、頑張れ。』と励まし、できたらしっかりほめる。」というようなアドバイスをいただきました。叱ることへの疑問がたくさんあった私は、はっとしました。叱る行為には、ほめることがついている、と気付いたからです。失敗をした児童が、次は同じことで失敗しない、ということは、その児童を思いきりほめるチャンスであると感じました。

また、失敗した児童がいた場合、周りの児童も、「あっ、あれはしてはいけないことなんだ。」と気

付くことができ、クラス全体で、善悪の区別がしっかりつけられるようになると思いました。叱ることは、その児童やクラスが成長できるチャンスである、と心に刻み、叱るときには必ずこのことを思い出そうと思いました。

③　学校という組織との関わりから得たこと

活動日には、登校してくる児童を校門で迎えます。校長先生をはじめとして、数人の先生方とあいさつ運動の看板を持った当番の児童、見守り隊の方と一緒に、元気な挨拶をしています。そのときに、地域の方が通りかかることがよくあります。朝の通勤時間帯であることもあり、お急ぎの方が多いですが、そのような方にも元気に挨拶ができる学校です。きっと、地域の方も、元気な学校を見て、気持ちがいいと思います。挨拶一つで、学校はとても明るくなると感じました。毎日の小さな積み重ねですが、学校という組織が地域に開かれていることで、地域の方との関わりが増え、子どもたちも安心して学校に通えるようになると思いました。

２．サポーター小学校の出来事で一番印象に残っていること。

１年間の活動を通して、子どもたちの成長を見られたことです。特に運動会、音楽会など、学校行事の前は、１週間ごとにぐんぐん成長する子どもたちの姿が見られ、驚きます。そして、それには先生方の懸命な指導があってのものだ、と感じます。１つの行事を成功させるためには、事前の準備から行事後の取り組みまで、確実に行うことが必要で、それらをこなしていった先には、喜びや感動があることを､子どもたちの達成感にあふれた表情から感じることができました。私も教師になったら、子どもたちが心に残るような行事を、子どもたちと作りあげていきたいと思いました。

３．スクールサポーターの活動と学業の両立の困難点、課題、またスクールサポーターというシステムの課題・改善点・アドバイス。

前期の最後の活動で、同じ小学校へ行っている他学年の方とお話しする機会がありました。そのときに初めて、同じクラスで他の曜日に活動している方がいることを知りました。曜日が異なるため、なかなか直接会って話すことはできませんが、どのような活動をしているのかを知ったり、困っていることを話し合ったりすることができて、とてもよい時間を過ごすことができました。特に、初めて活動に参加する２回生は、戸惑うことも多いようだったので、このような機会を定期的に取り入れるといいなと感じました。前期終了後だけでなく、活動場所が決まったら、スクールサポーターの活動が始まる前に同じ小学校に行くメンバーで集まり、３，４回生が経験したことを伝えたり、心構えなどを話し合ったりすることによって、活動の姿勢も変わってくるだろうと思います。

４．２．３回生は来年もスクールサポーターに応募しますか？またその理由を記述してください。４回生は下級生にスクールサポーターを勧めますか？またその理由を記述してください。

私は、２回生のときから、スクールサポーターとして活動していました。特に２回生のときは、大学の授業との両立が大変でしたが、机に向かってする勉強だけでなく、実際に子どもたちと関わり、学校現場をみておくことは、非常に大切だと感じました。自分の頭で考えていること、現状は異なっ

ていたからです。また、教員採用試験に向けて勉強していく中で、実際に子どもたちと関わることが励みになったり、教師になったらこういうことをしてみたい、というアイディアが浮かんだり、教師になることへの思いが強くなりました。自分の持つ技術や知識を実践することもでき、更にそれらを向上していこうという気持ちになりました。教師になるための準備として、教師・児童を関わっていくことができるのは、スクールサポーターの特権だと思います。

5．将来教師になったときこのスクールサポーターとしての経験をどう教育活動に生かすか。

春から教壇に立つ私にとって、スクールサポーターとしての３年間の活動は、決して忘れることのできない、貴重な経験となりました。それは、教師と児童の両方の立場になり、互いの気持ちを考えることができたからです。教師になったとき、様々な困難や大きな壁が待ち受けていると思います。そのようなときに、スクールサポーターで経験したことを思い出したいです。子どもたちの笑顔や言葉を思い出し、教師の自分を児童目線で見つめることで、子どもたちのために何ができるのか、初心になって考え、自分を奮い立たせたいと思っています。

また、先生が実践されていた授業や学級経営の仕方についても、学ぶことが本当にたくさんありました。児童への細かい配慮であったり、時間の使い方であったり、児童への言葉かけの仕方など、なるほど、と思うことばかりでした。学んだことに、私なりの工夫を加えつつ、私らしさを組み込みながら、十分に生かしていきたいと思っています。

6．その他、スクールサポーターについて何かあれば自由に記述してください。

３年間のスクールサポーターの活動は、長いようであっというまでした。大学の授業の関係で思うような活動ができなかったり、教育実習中や教員採用試験前など、活動できない時期があったりしましたが、ここまで継続して活動できたのは、小学校の先生方のご協力があってのことです。いつも温かく迎えてくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

スクールサポーターの活動を通して、先生方、子どもたち、そして、地域の方との素晴らしい出会いがありました。学校という場所は、私にとって原点であり、未来が広がっていく場所でもある、ということを、身をもって経験することができました。

次は、教師として、子どもたちが将来や未来を広げられるように、子どもたちにとって居心地のよい学校づくりをしていきたいと思いました。スクールサポーターの活動を経験することができて、本当によかったと心から思っています。